

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞  
口永良部島では、主に古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。

火山活動が高まった状態となっており、新岳火口及び古岳火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があることから、本日（27日）19時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

### 【防災上の警戒事項等】

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況

口永良部島では、7月14日頃から古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。新岳火口付近においても時折、火山性地震が発生しています。火口浅部における火山性地震は7月18日から本日（27日）までの10日間に100回発生しています。

火山活動が高まった状態となっていることから、新岳火口及び古岳火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

7月23日に山上で実施した現地調査では、新岳及び古岳の噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。新岳火口内及びその周辺で引き続き地熱域を確認しました。古岳火口底縁辺部の一部の地熱域でわずかな広がりを確認しました。

---

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level\\_kijunn/keikailevelkijunn.html](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html)

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり100トン未満と少ない状態で経過しています。7月26日の観測では1日あたり30トンでした。

GNSS 連続観測では、2023年11月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

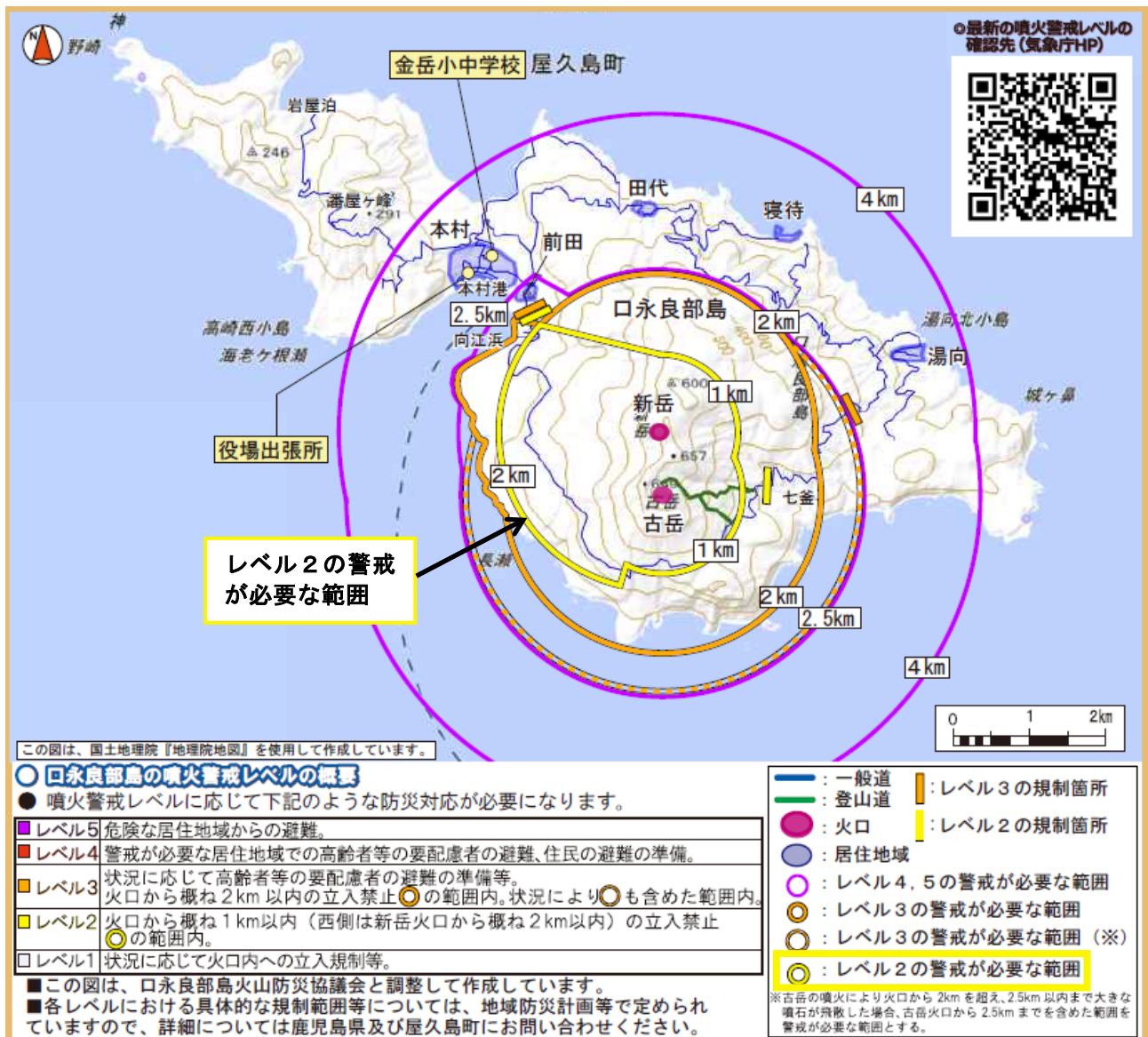


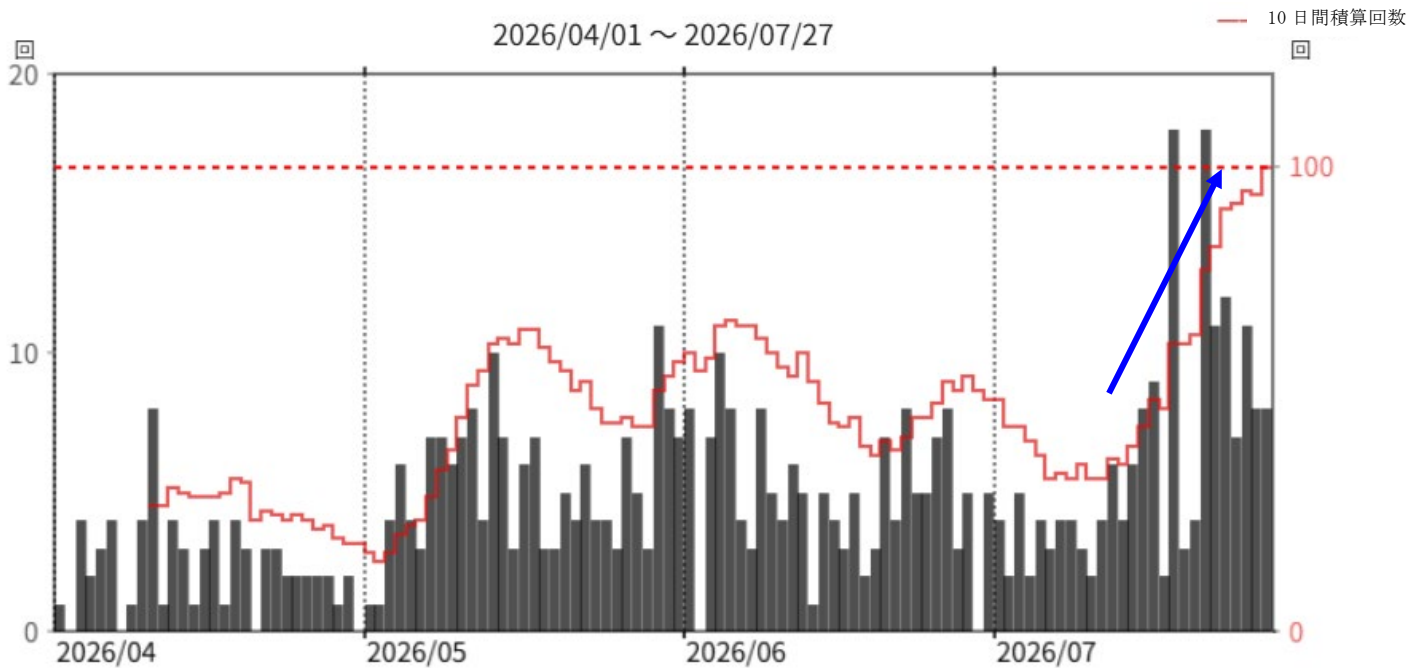
図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

① 口永良部島 火口浅部における火山性地震の日別回数及び10日間積算回数



② 口永良部島 火口浅部における火山性地震の最大振幅（古岳北観測点上下動成分）及び積算振幅

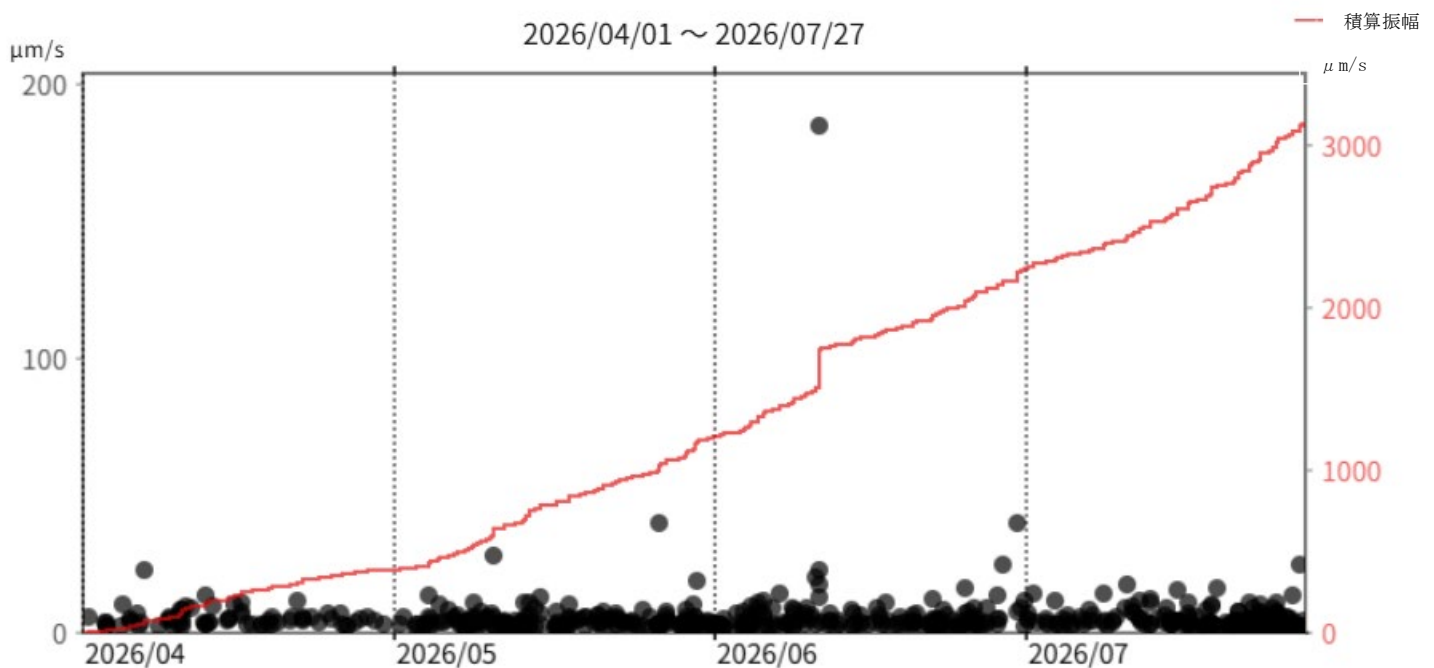


図2 口永良部島 火口浅部における火山性地震発生状況（2026年4月1日～7月27日19時までの速報値）

- ・ 7月14日頃から古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。新岳火口付近においても時折、火山性地震が発生しています。火口浅部における火山性地震は7月18日から本日（27日）までの10日間に100回発生しています。
- ・ 振幅の大きな火山性地震は発生していません。



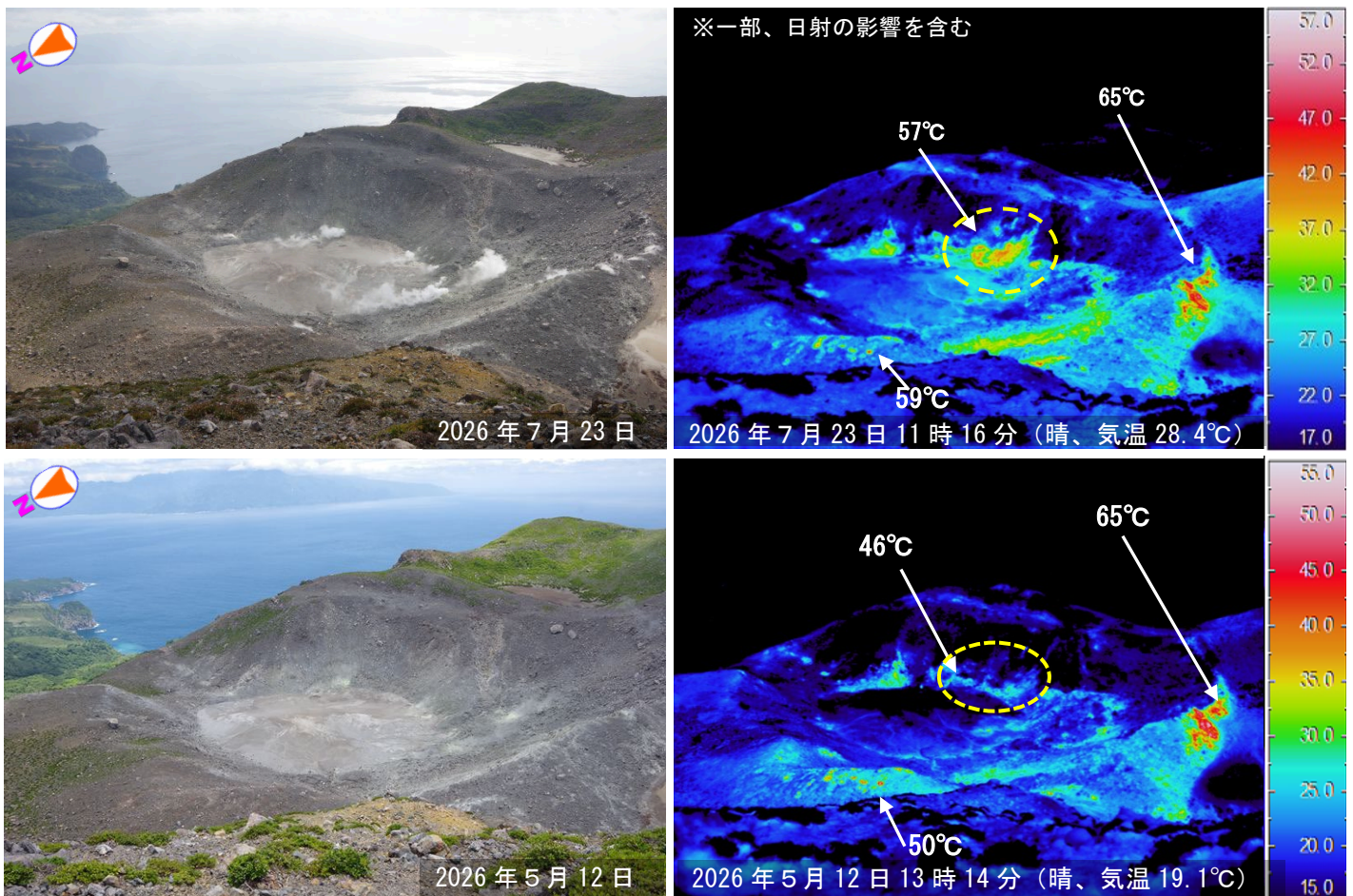
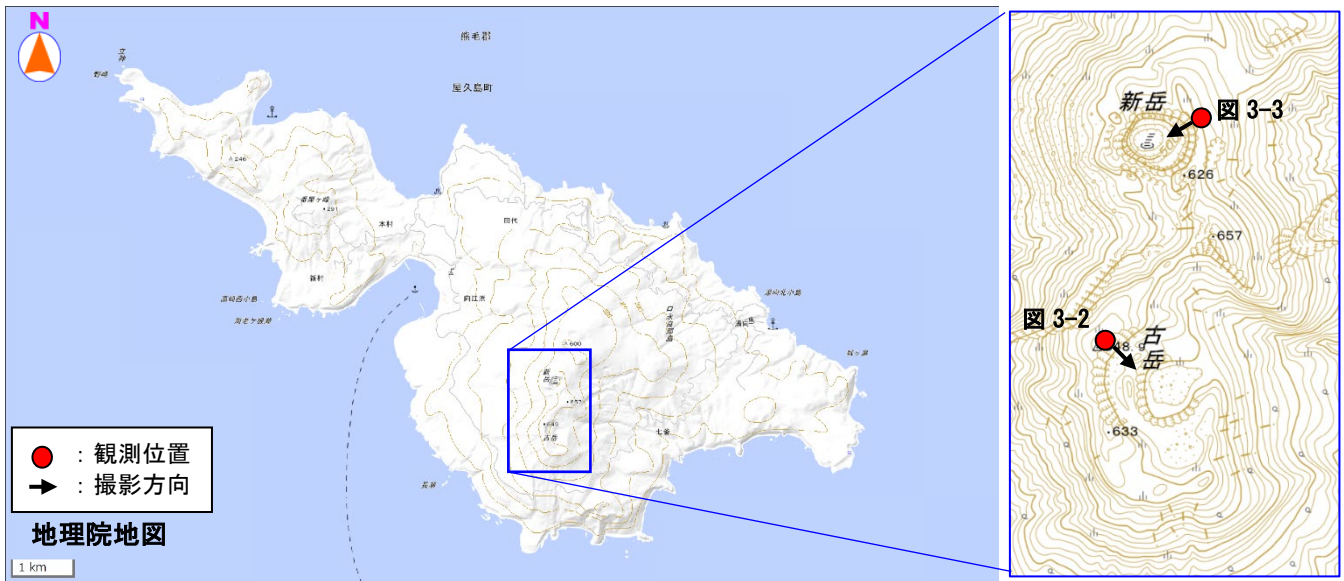


図3-2 口永良部島 古岳火口内の状況（古岳山頂から観測）

- ・ 7月23日に山上で実施した現地調査では、古岳火口内及びその周辺で引き続き地熱域を観測しました。また火口内に留まる程度の噴煙を確認しました。
- ・ 前回（5月12日）と比べて火口底縁辺部の一部の地熱域でわずかな広がりを確認しました（黄色破線内）。
- ・ その他の地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。



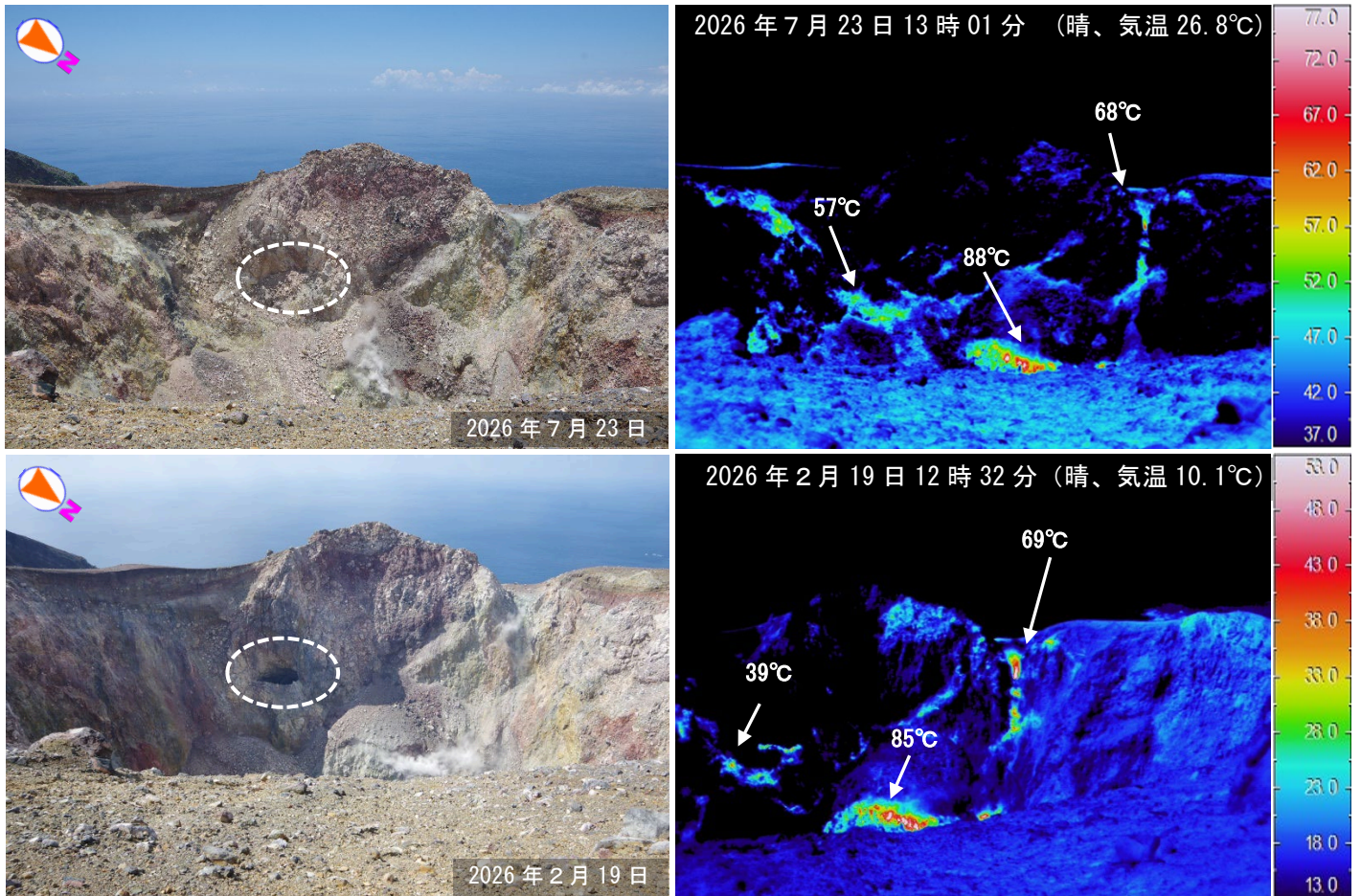


図 3-3 口永良部島 新岳火口内の状況（新岳火口縁北東側から観測）

- ・ 7月23日に山上で実施した現地調査では、新岳火口内及びその周辺で引き続き地熱域を観測しました。また火口内に留まる程度の噴煙を確認しました。
- ・ 地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。
- ・ これまでの観測で確認していた火口内南西側の孔が土砂により埋没していることを確認しました（白破線内）。

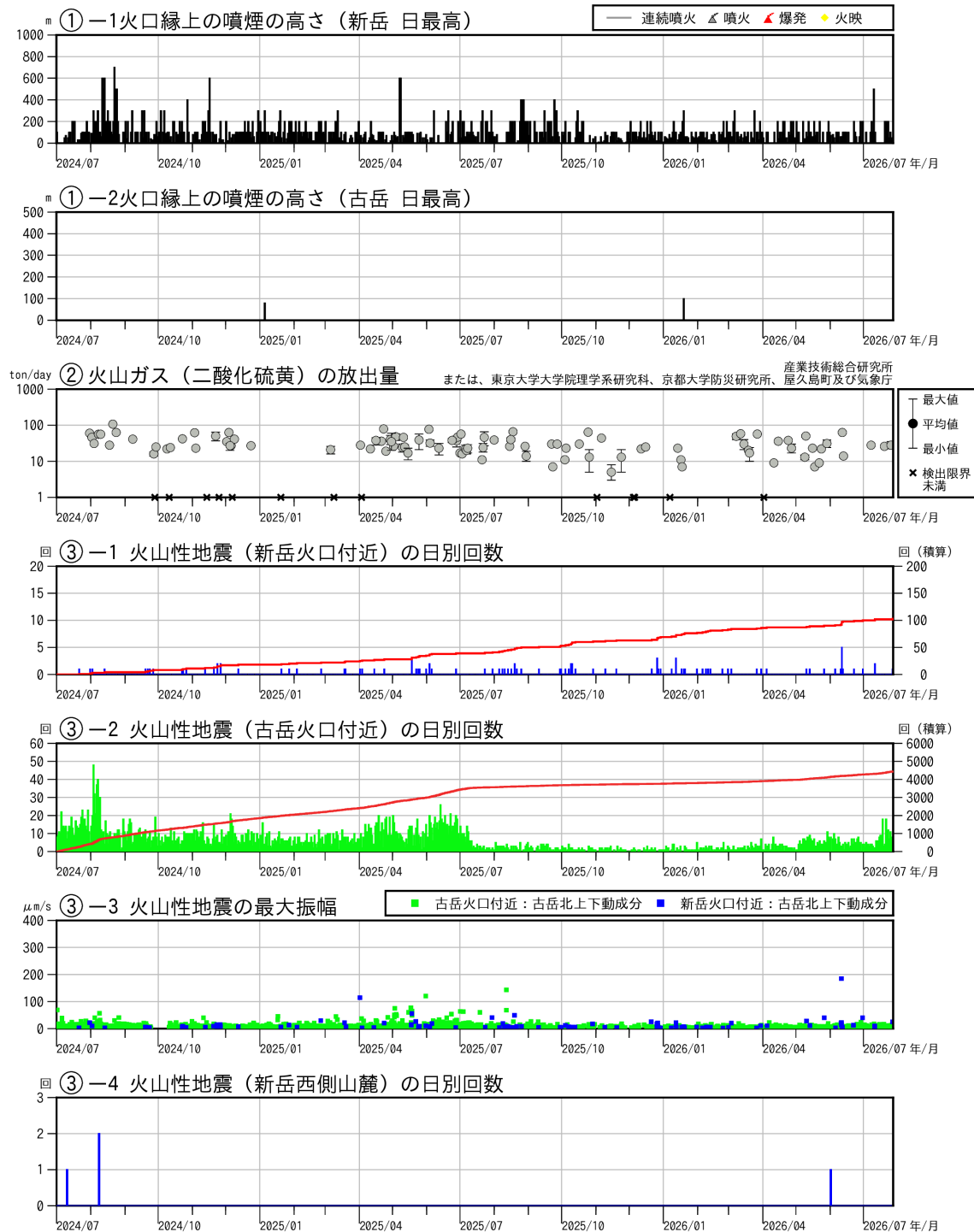


図4 口永良部島 最近の火山活動経過図（2024年7月～2026年7月27日19時までの速報値）

#### <2026年7月以降の概況>

- ・噴煙の状況に変化はなく、白色の噴煙が新岳火口では最高で火口縁上500mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は確認されませんでした。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり100トン未満と少ない状態で経過しています。7月26日の観測では1日あたり30トンでした。
- ・5月頃から古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が増減を繰り返しています。7月14日頃から古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。新岳火口付近においても時折、火山性地震が発生しています。火口浅部における火山性地震は7月18日から本日（27日）までの10日間に100回発生しています。
- ・振幅の大きな火山性地震は発生していません。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

※③-3 古岳北観測点の障害のためデータが抜けている期間があります。  
赤線は火山性地震の回数や火山性微動の時間の積算（右軸）を示します。

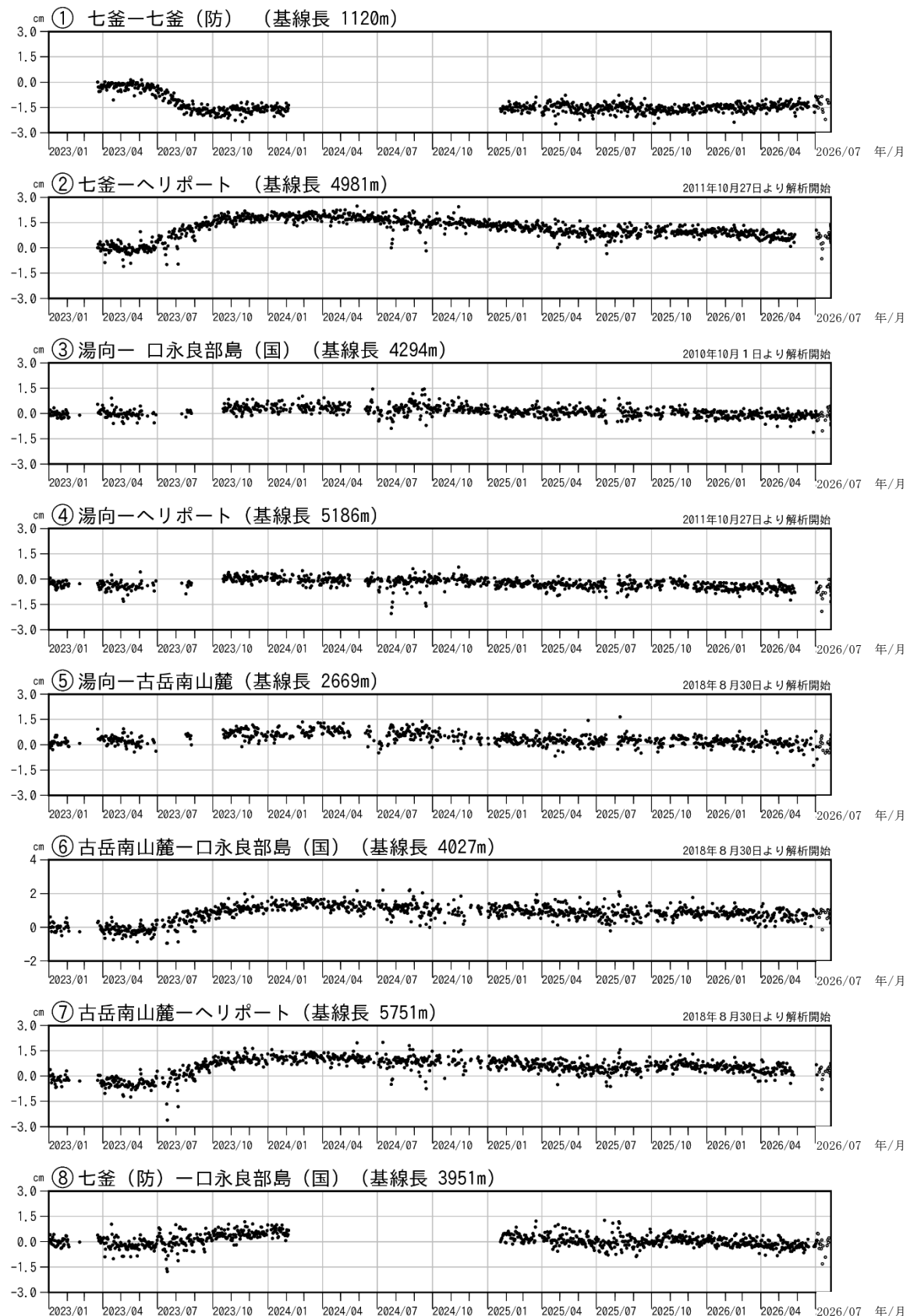


図5 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2023年1月～2026年7月25日）

GNSS 連続観測では、2023年11月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図6の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

直近の白丸は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

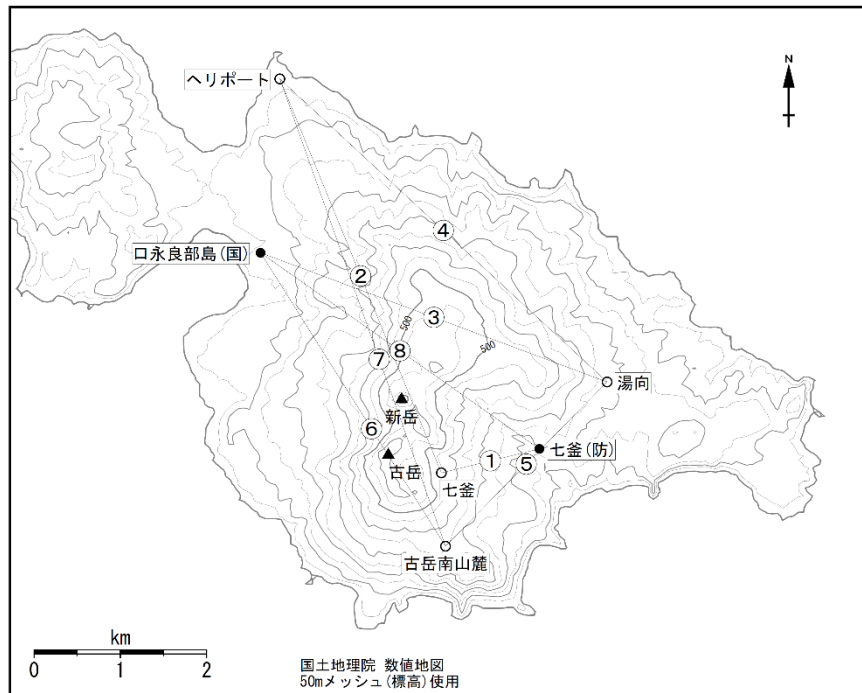


図6 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(防) : 防災科学技術研究所

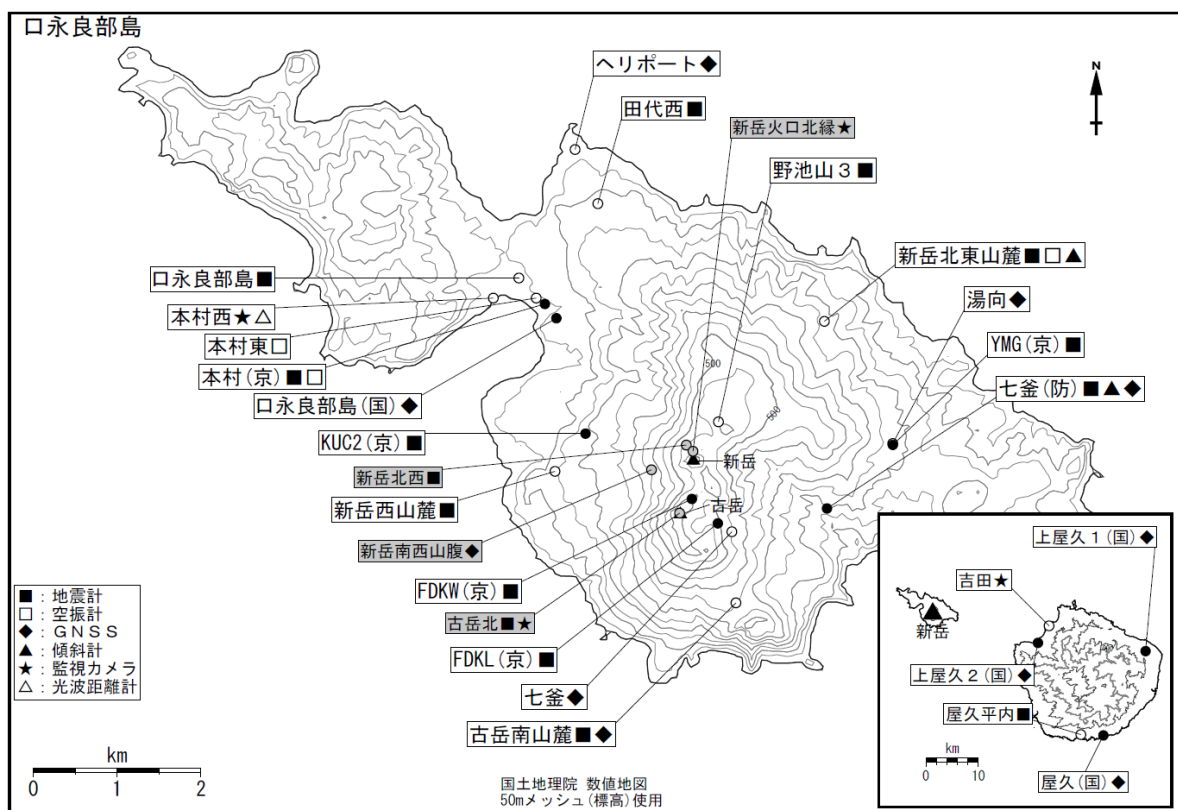


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。